夏目漱石著「虞美人草」新潮文庫、新潮社 1951 年 10 月 25 日刊を読む

虞美人草

１．「随分遠いね。元来何所(どこ)から登るのだ」
　と一人が手巾(ハンケチ)で額を拭(ふ)きながら立ち留った。
「何所か己(おれ)にも判然(はんぜん)せんがね。何所から登ったって、同じ事だ。山はあすこに見えているんだから」と顔も体軀(からだ)も四角に出来上った男が無雑作に答えた。

２．反を打った中折れの茶の廂(ひさし)の下から、深き眉(まゆ)を動かしながら、見上げる頭の上には、微茫(かすか)なる春の空の、底までも藍(あい)を漂わして、吹けば揺(うご)くかと怪しまるる程柔らかき中に屹然(きつぜん)として、どうする気かと云わぬばかりに叡山(えいざん)が聳(そび)えている。

３．「恐ろしい頑固(がんこ)な山だなあ」と四角な胸を突き出して、一寸(ちょっと)桜の杖(つえ)に身を倚(も)たせていたが、
「あんなに見えるんだから、訳はない」と今度は叡山を軽蔑(けいべつ)した様な事を云う。
「あんなに見えるって、見えるのは今朝宿を立つ時から見えている。京都へ来て叡山が見えなくなっちゃ大変だ」
「だから見えてるから、好(い)いじゃないか。余計な事を云わずに歩行(ある)いていれば自然と山の上へ出るさ」

４．細長い男は返事もせずに、帽子を脱いで、胸のあたりを煽(あお)いでいる。日頃からなる廂に遮(さえ)ぎられて、菜の花を染め出す春の強き日を受けぬ広き額だけは目立って蒼白(あおじろ)い。
「おい、今から休息しちゃ大変だ、さあ早く行こう」
　相手は汗ばんだ額を、思うまま春風(はるかぜ)に曝(さら)して、粘り着いた黒髪の、逆(さか)に飛ばぬを恨む如くに、手巾(ハンケチ)を片手に握って、額とも云わず、顔とも云わず、頸窩(ぼんのくぼ)の尽くるあたりまで、苦茶々々に掻(か)き廻した。促がされた事には頓着(とんちゃく)する気色(けしき)もなく、

５．「君はあの山を頑固だと云ったね」と聞く。
「うむ、動かばこそと云った様な按排(あんばい)じゃないか。こう云う風に」と四角な肩をいとど四角にして、空(あ)いた方の手に栄螺(さざえ)の親類をつくりながら、聊(いさき)か我も動かばこその姿勢を見せる。
「動かばこそと云うのは、動けるのに動かない時の事を云うのだろう」と細長い眼の角から斜めに相手を見下(おろ)した。
「そうさ」
「あの山は動けるかい」
「アハハハ又始まった。君は余計な事を云いに生れて来た男だ。さあ行くぜ」と太い桜の洋杖(ステッキ)を、ひゅうと鳴らさぬばかりに、肩の上まで上げるや否や、歩行(ある)き出した。痩(や)せた男も手巾を袂(たもと)

に収めて歩行き出す。
「今日は山端(やまばた)の平八茶屋(へいはち)で一日(いちんち)遊んだ方がよかった。今から登ったって中途半端になるばかりだ。元来頂上まで何里あるのかい」
「頂上まで一里半だ」
「どこから」
「どこからか分るものか、高(たか)の知れた京都の山だ」

6．痩せた男は何(なん)にも云わずににやにやと笑った。四角な男は威勢よく喋舌(しゃべ)り続ける。
「君の様に計画ばかりして一向実行しない男と旅行すると、どこもかしこも見損(そこな)ってしまう。連(つれ)こそいい迷惑だ。」
「君の様に無茶に飛び出されても相手は迷惑だ。第一、人を連れ出して置きながら、何処から登って、何処を見て、何処へ下りるのか見当がつかんじゃないか」
「なんの、これしきの事に計画も何もいったものか、高があの山じゃないか」
「あの山でもいいが、あの山は高さ何千尺だか知っているかい」
「知るものかね。そんな下らん事を。――君知ってるのか」
「僕も知らんがね」
「それ見るがいい」
「何もそんなに威張らなくてもいい。君だって知らんのだから。山の高さは御互に知らんとしても、山の上で何を見物して何時間かかる位は多少確めて来なくちゃ、予定通りに日程は進行するものじゃない」
「進行しなければ遣(や)り直すだけだ。君の様に余計な事を考えてるうちには何遍でも遣り直しが出来るよ」と猶(なお)さっさと行く。痩せた男は無言のままあとに後(おく)れてしまう。

7．春はものの句になり易(やす)き京の町を、七条から一条まで横に貫ぬいて、烟(けぶ)る柳の間から、温(ぬく)き水打つ白き布を、高野川(たかのがわ)の磧(かわら)に数え尽くして、長々と北にうねる路を、大方は二里余りも来たら、山は自(おのず)から左右に逼(せま)って、脚下に奔(はし)る潺湲(せんかん)の響も、折れる程に曲がる程に、あるは、こなた、あるは、かなたと鳴る。山に入りて春は更(ふ)けたるを、山を極(きわ)めたらば春はまだ残る雪に寒かろうと、見上げる峯(みね)の裾(すそ)を縫うて、暗き陰に走る一条(ひとすじ)の路に、爪上(つめあが)りなる向うから大原女(おおはらめ)が来る。牛が来る。京の春は牛の尿(いばり)の尽きざる程に、長くかつ静かである。

8．「おおい」と後れた男は立ち留りながら、先きなる友を呼んだ。おおいと云う声が白く光る路を、春風に送られながら、のそり閑と行き尽して、萱(かや)ばかりなる突き当りの山に打突(ぶつか)った時、一丁先きに動いていた四角な影ははたと留った。痩せた男は、長い手を肩より高く伸(の)して、返れ返れと二度程揺(ゆす)って見せる。桜の杖が暖かき日を受けて、又ぴかりと肩の先に光ったと思う間もなく、彼は帰って来た。

9．「何だい」
「何だいじゃない。此所(ここ)から登るんだ」
「こんな所から登るのか。少し妙だぜ。こんな丸木橋を渡るのは妙だぜ」

「君みた様に無暗(むやみ)に歩行(あるい)いていると若狭(わかさ)の国へ出てしまうよ」

「若狭へ出ても構わんが、一体君は地理を心得ているのか」

「今大原女に聴いて見た。この橋を渡って、あの細い道を向へ一里上がると出るそうだ」

「出るとは何処へ出るのだい」

「叡山の上へさ」

「叡山の上の何処へ出るだろう」

「そりゃ知らない。登って見なければ分らないさ」

「ハハハハ君の様な計画好きでも其所(そこ)までは聞かなかったと見えるね。千慮の一失か。それじゃ、仰(おお)せに従って渡るとするかな。君愈(いよいよ)登りだぜ。どうだ、歩行けるか」

P.5 ～ 9

＜コメント＞

夏目漱石が 41 歳の時に、朝日新聞にプロの小説家として入社して初めて書いた 127 回にわたる連載小説、名作「虞美人草」の冒頭の一節。緊張感のある文章がどんどん続き、引き込まれる。一度読んだことのある方も、また、未だ読んだことのない方も、是非じっくりと御一読を。

＊明治時代の新聞の編集者と読者の知的レベルの高さに脱帽する。

― 2016 年 9 月 5 日（月）　林　明夫記―